電波星のフラックス特殊測定法

大口径アンテナの最も重要な特性である利得の測定法を 1967 年（昭和 42）に開発した。中でも、電波星を基準にした測定方法では、KDD 茨城衛星通信所の 20m アンテナを使って、Cas-A、Tau-A、Cyg-A のような代表的な電波星の放射特性を測定し、その性質を定量的に明示した。このような天体電波を測定源とする利得測定法は、インテルサットにおいても高く評価された。本方法は通信衛星暫定委員会（ICSC）へ提案後、衛星通信用地球局アンテナの標準利得測定法として採用された。

出典：KDD 社史